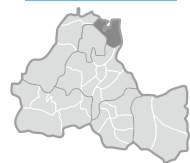


港地区 (豊岡地域)



港地区は田山川河口部に位置し、その田山川を挟み東西合わせて4地区で水稻栽培を中心に農業が営まれています。家庭菜園が中心の集落、全域が湿地で維持管理されている集落など、さまざまな形で農地が維持されています。

い担い手農家が規模拡大しやすく、持続可能な農業ができるよう、再基盤整備など、施策の早急な実施が期待されるところです。

今春、農業スクールの卒業生が、野菜・ブドウ栽培に就農しました。来年も一人が就農予定で、地域の農業を盛り上げてくれます。

農地利用最適化推進委員として、港小学校5年生による「田植え・稲刈り農業体験」、港認定こども園での「サツマイモ苗植え」「バケツを使ったお米作り体験」「豊岡うまいもんかるた」など食育活動に参加する機会が増えました。その中で「子どもたちが農業に親しみをもち、将来の選択肢の一つとして考えてもらえたら」と期待しています。

(推進委員 嶋 理宏)

清滝地区 (日高地域)



清滝地区は、標高差が大きく農地集約が難しいですが、近隣には道の駅、スキー場、キャンプ場などの観光資源が多数あります。

各組合、企業、耕作者は、観光と農業を融合させ、地域の魅力を高めるさまざまな取組みに、失敗を恐れることなく挑戦しています。

例としては、キャベツ出荷時期に合わせて、キャベツ丸かじり大会を実施し、地元農産物を通じて地域コミュニティの交流と活性化を図っています。その中で、結婚を機に都会から移住した若い女性に参加し、堂々の優勝を果たしました。彼女の奮闘と笑顔は、参加者全員を魅了し、大きな拍手を浴びました。

また、地元の子どもたちに、イチゴ狩りなどの収穫体験を通じて、農業の楽しさを感じてもらい、生育していく仕組みや栽培環境の説明も行い、食べ物への関心を高めてもらえるよう努力しています。

道の駅「神鍋高原」への出荷者は

100名を超えています。しかしながら遊休農地は増える一方です。現在、農業未経験で会社などを退職した人への声掛けに力を入れていきます。農業の魅力を体験することで、「食べ物を作る喜び」と「収入につながる可能性」を知ってもらい、余暇活動や収入補完の形で農業を楽しんでもらうことを薦めています。退職者が培ったスキルや人脈は、想像のつかないパワーを持っているように感じます。

多くの方から知恵をお借りし、遊休農地解消に向け、試行錯誤してきたいと思っています。

(推進委員 辻野 吉昭)



高尾農業委員



嶋推進委員



港認定こども園サツマイモ苗植え



原農業委員



辻野推進委員



清滝小学校イチゴ狩り体験

「『豊岡ぶどう』に夢を乗せて」

廣田 大さん(法花寺)

豊岡市内では、令和6年度豊岡市農業スクールの卒業生5名のうち3名がブドウ農家として頑張っています。廣田大さんはそのうちの一人です。ブドウ農家になって一旗揚げの大志を抱いていた廣田さんは、大学病院の看護師長を辞して神戸市から豊岡市に移住してきました。

これまで豊岡市との繋がりがなかった廣田さんは、住む家もブドウ栽培する場所も一から探さなければなりませんでした。農地バンクやJAなどを利用するほか、農業委員会、たじま農協葡萄部、若手農業者など多くの方々から協力を得ながら探し続けること2年間。そして、この4月、豊岡市内に農地付きの古民家と既存ブドウ園を手に入れて独立しました。

現在は、新規ブドウ園を造成しながら、譲り受けたブドウ園と野菜畑の手入れなど、揚々と一歩を踏み出したところです。

今後も、多くの方々に支えられながら、強い信念と観察力を活かして廣田さんらしい「ブドウ園」をつくりあげてほしいと思います。

将来的には、「豊岡ぶどう」を牽引する担い手の一人として様々な場面に登場するように期待しているところです。

(推進委員 吉岡 正人)



自ら経営するブドウ園と廣田 大さん

「安全・安心の農作物をお届け」

安岡 由紀夫さん(日高町)

安岡由紀夫(62歳)さんは、妻、長男、次男の4人家族です。但馬日高農協に10年余り勤務した後、父親の後を継ぎ就農されました。当初は母親の協力を得ながら始められました。

水稲70アールのほかに、1ヘクタールの畑に四季を通して多種多様な野菜を栽培され、近くの直売所に出荷されています。

農業を始めたころは春・秋のキャベツが主な作物でしたが、5年前に勧められたスイカ栽培では、10アールの栽培面積を今年から15アールに増やして栽培する計画です。

春から夏にかけては長トウガラシ、サトイモ、ナスを、秋から冬にかけては主にダイコンなどを栽培し、出荷範囲は、道の駅「神鍋高原」や「たじまんま」以外にも広げられるなど、何よりも消費者の笑顔を楽しみに栽培・販売されています。特にダイコンは、漬物等に加工する希望者にも直接分けておられます。

安全・安心を第一に挙げ、「米ぬか」や「発酵鶏糞」に加え、有機栽培も手掛ける傍ら、自己所有農地を荒らさないことを心掛け、遊休農地の借上げや周辺の草刈りをするなど、遊休地の解消を目指しています。とはいえ、耕作放棄は増加の一途をたどり、シカやイノシシによる獣害は作物の収量にまで悪影響を及ぼしており、「一人の力では手の施しようがない」と、農業の将来を懸念されています。

60歳代になったことを契機に、徐々に長男に農業を託したいとの思いがあるとのことでした。

(農業委員 原 清美)



15アールに拡大したスイカ畑と田起こしする安岡 由紀夫さん